

明示化としての哲学：直観あるいは常識の擁護

飯川 遥 (Haruka Iikawa)

一橋大学社会学研究科

哲学の議論における直観の使用は、実験哲学の隆盛以来、集中的な反論にあってきた (Pust, 2024; 鈴木, 2020)。それによれば、直観は、シナリオの提示の順番などの哲学的に関係のない要素に左右されたり、人々の間に大きな不一致があったりするなど、信頼できないとされる。この反論に対して、そうした挑戦は自己論駁的であるとか、非専門家の直観はともかく哲学者の直観は信頼できる (expertise defense) とか、そもそも直観はそれほど重要ではない (mischaracterization defense) といった再反論が提示されてきた。

しかし、そうした個人的/個人間的な一貫性が実際にあるかどうかは経験的な問題だが、仮にそのような一貫性があるとしても、なぜ直観にデフォルトで正当化の力があるかは明らかではない。仮にある直観的判断が共同体に完全に共有され、しかも哲学的に関連しない要素に左右されないとして、なぜその直観が信頼できると言えるのだろうか。実際、物理に関する (たとえば、飛行機から物体を落とした場合の物体の軌道についての) 私たちの直観はどれほど共有され一貫していようとも、それほど信頼できない。

他方、mischaracterization の論者たちは、直観に訴えているとされる事例の判断においても、実際には単にそうした判断が直観的だと述べられるのではなく、もっともらしい前提からの論証がなされているので、直観は哲学において主要な役割を果たさないと主張する (Horvath, 2022)。ここで、そうした前提自体のもっともらしさは、それらが共有基盤になっているということに基づくとされる。

しかし、哲学の議論においてある命題が共通に信じられているとしても、その命題が実際に真であるかということや正当化されているかどうかということはまた別の問題である。自然科学の場合には、そういった命題は経験的チェックに基づいているが、哲学の議論における (たとえば双子地球の思考実験のような) 事例の判断の場合には何に基づくのだろうか。それが最終的に直観に基づくかどうかはともかく、そうした常識的前提がなぜ信頼できるのかを説明する必要がある。

本発表では、《哲学的探求の目的の一つは実践の規範を明示化することである》と主張し、この目的に資する限りにおいて、直観ないし常識を利用することを擁護する。ここで実践の規範とは、私たちの実践上のふるまいの適切性を規定する事柄である。

ある種の哲学的議論は、認識的規範や実践的合理性、語用論的/意味論的適切性などの、私たちが実践において運用している適切性の基準の定式化を目指している。たとえば、バイズ認識論では合理的な信念の度合いの変化の仕方を規定する規範の定式化が目指されている (Lin, 2023)、言語行為としての主張に関する哲学的議論は、主張が適切になる条件を規定する規範の定式化に割かれてきた (Pagin & Marsili, 2021)。このように、哲学的探求の少なくとも一部は、私たちの実践を支配する規範を特定することを目

的としている。

探求の方法は目的によって正当化される(Laudan, 1986=2009)。たとえば、(近似的に) 真な信念を獲得するという科学の目的は、ある理論がデータを予測するかどうかをテストするという方法を正当化する。

同様に、規範を明示化するという目的が、私たちの直観や常識を利用することをデフォルトで正当化する。というのも、明示化される規範は私たちが現に従っているものだからである。実践において実際に従われているという意味で実効的な規範は、実践の参加者たちの受容 (acceptance) によって基礎づけられる(Reiland, 2020, 2023)。それゆえ、自らが参加する実践において現に従っている規範についての私たちの直観ないし常識がデフォルトで信頼できると考えることはもっともらしい。もちろん、直観や常識的前提に何らかの意味で一貫性がないということはそれらの正当性を阻却しうるが、もしそうでないなら、規範の明示化を目的にしていると解釈できる哲学的探求においては、それらを利用することは正当化されるのである。

参考文献

- Horvath, J. (2022). Mischaracterization reconsidered. *Inquiry*, 1–40. <https://doi.org/10.1080/0020174X.2021.2019894>
- Laudan, L. (1986). *Science and Values: The Aims of Science and Their Role in Scientific Debate* (小草 泰、戸田山 和久訳 (2009) 『科学と価値——相対主義と実在論を論駁する——』勁草書房). The University of California Press.
- Lin, H. (2023). Bayesian Epistemology. In E. N. Zalta & U. Nodelman (Eds.), *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Winter 2023). Metaphysics Research Lab, Stanford University. <https://plato.stanford.edu/archives/win2023/entries/epistemology-bayesian/>
- Pagin, P., & Marsili, N. (2021). Assertion. In E. N. Zalta (Ed.), *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Winter 2021). Metaphysics Research Lab, Stanford University. <https://plato.stanford.edu/archives/win2021/entries/assertion/>
- Pust, J. (2024). Intuition. In E. N. Zalta & U. Nodelman (Eds.), *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Fall 2024). Metaphysics Research Lab, Stanford University. <https://plato.stanford.edu/archives/fall2024/entries/intuition/>
- Reiland, I. (2020). Constitutive Rules: Games, Language, and Assertion. *Philosophy and Phenomenological Research*, 100(1), 136–159. <https://doi.org/10.1111/phpr.12525>
- Reiland, I. (2023). Regulative rules: A distinctive normative kind. *Philosophy and Phenomenological Research*, phpr.13008. <https://doi.org/10.1111/phpr.13008>
- 鈴木貴之 (Ed.). (2020). 『実験哲学入門』. 勁草書房.